

特集企画

ジュニア競技者育成における身体リテラシーの意義

特集「ジュニア競技者育成における身体リテラシーの意義」によせて

日本陸上競技連盟（以下「陸連」という。）は、2017年5月に発行した「JAAF VISION 2017」において、「国際競技力の向上」と「ウェルネス陸上の実現」という2つのミッションを掲げるとともに、「2028年までに世界のトップ8、2040年までに世界のトップ3（アジアのNo.1）を目指した競技者の育成・強化を推進する」、「アスレティックファミリー（競技会参加者、審判、指導者）を2028年までに150万人、2040年までには300万人に拡大させる」などの具体的な数値目標を設定した。また、2018年9月には、上記の目標達成に向けて、陸上競技の普及と競技者の育成・強化の両面を見据え、生涯を見通す長期的展望に立った競技者育成のあり方を具体的に示した「日本陸上競技連盟・競技者育成指針（以下「指針」という。）」を策定した。

この指針では、若年期競技者を取りまく現状と課題を踏まえて、「陸上競技に接する幅広い機会の提供」、「基礎的な運動能力を適切に発達させるための活動支援」、「多様なスポーツおよび複数種目の実施を奨励」など、今後の競技者育成の方向性が提示されている。また、それらの方向性を踏まえ、競技者の育成過程において身体的および精神的（知的）な成長の最適化を図るために、年齢（学年）や発育発達段階を考慮した6つのステージ別の具体的な留意点なども示されている。ここでは、特に幼少年期において基礎的な身体活動や運動・スポーツ活動を多様に経験することの重要性が強調されており、その中核となるキーワードとして「身体リテラシー（physical literacy）の育成」が挙げられている。

身体リテラシーは、指針の中では「さまざまな身体活動・運動・スポーツについて自信をもって行うことができる基礎的なスキル」と定義づけられているが、「運動を楽しく、有能感をもって、意欲的に行えるといった心理的な側面、あるいは仲間と協調・協働できる社会的側面」も含まれることや、このリテラシーが身につくことによって「生涯を通して健康的で活発なライフスタイルを送ることが期待できる」と補足されるなど、生涯にわたるスポーツ実践を通して涵養されるべきリテラシー（能力）であると考えられている。

本紀要では、これまでジュニア競技者の育成に焦点化し、「陸上競技のタレントトランスファー（2014年）」、「若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向（2016年）」、「ジュニア競技者育成と相対年齢効果（2017年）」などのテーマの特集が組まれてきており、これらの内容は指針の作成過程においても大いに参考にされ活用もされてきた。そして、身体リテラシーは、これら過去の特集においても、発育段階で最も重視すべき育成目標として随所に登場してきた中核的な概念といえるが、我が国ではまだまだ馴染みが薄く、否、国際的にも、その概念規定に関してはまだ議論の途上にある。

そこで本号では、特集のテーマを「ジュニア競技者育成における身体リテラシーの意義」に設定し、その概念をめぐる論考や身体リテラシー育成の実践事例などに関する議論を展開していただくこととした。この身体リテラシーの概念を明確にするとともに、とりわけ小・中学校期の指導現場における理解と共有を促すことは、陸上競技の普及・啓発はもとより、今後、指針をベースとした競技者育成プログラムの作成や強化育成システムの構築などを展望するうえでも必須であると考えられる。本特集が、そのきっかけとなれば幸いである。

<特集企画> ジュニア競技者育成における身体リテラシーの意義

目 次

陸上競技青少年育成モデルを再考する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
― 身体リテラシー育成との関連から日本小学校陸上を展望 ―	
伊藤静夫	
競技スポーツと生涯スポーツを融合させた若い競技者育成モデルの普及に向けた課題：・・・	12
北米における身体リテラシーの普及状況に着目して	
早乙女誉	
IAAF キッズアスレティックスと身体リテラシー・・・・・・・・・・・・・・・・	19
―IAAF キッズアスレティックスの理念と我が国での展開―	
小林敬和	
キッズアスレティックスの実践と身体リテラシー・・・・・・・・・・・・・・・・	25
―キッズアスレティックスにおいて身体リテラシーはどのように捉えられているか―	
森健一	